
忘れかけていた思い出

tsu-3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘れかけていた思い出

【Nコード】

N2921G

【作者名】

t s u - 3

【あらすじ】

親父はいつも厳しくよく俺は叱られていた。そんな親父にももう会うことが出来ない。でもなんで俺は悲しみを感ずることが出来ないんだ？

(前書き)

ベタな話ですが読んでくれると嬉しいです。

1週間前、俺の親父が長い間患っていたガンによってこの世を去った。その親父が死ぬ1日前、俺とお袋は医者に『もういつ亡くなってもおかしくない状態です。心の準備をしておいてください。それと少しでも長くそばにいてあげてください。』と言われた。そんなこと言われなくなつてわかつてる、でも1秒でも長く生きようとしてる親父を見て心の準備をしとけなんて出来るわけないだろ、と思つていた。そして俺がそんなこと思つている中、親父は、息を引き取つた。お袋が泣き叫んでいる中、俺は声が出なかつた。涙も出なかつた。そしていつの間にか自分の部屋で朝を迎えていた。何だ夢だつたんだ。そう思いながらリビングに行くとお袋が目を真っ赤にして親父の写真を見ていた。俺は馬鹿か！昨日、あんなことがあつたのに夢で終わらせるつもりだつたのか！初めて自分を殴りたくなつた。

親父が死んでからのこの1週間は本当に色々あつた。通夜と葬式、それからお墓とかそんなことばつかで悲しむ暇さえなかつた。いや、あつたのかもしれないけど悲しみなんて感じなかつた。

1週間経つた今日、俺は親父の部屋を整理していた。お袋はまだ立ち直つていないから仕方なく俺がやつている。整理をしていくと色々なものが出てきた。俺のために読んでいたポロポロの絵本や、俺の中学、高校の制服、初めて誕生日にプレゼントした親父の顔の絵。こんなものまで置いといてくれたんだなと思つた。その中にポロポロで肩の部分が切れて縫い直した後のあるランドセルが出てきた。何で縫い直してるんだと思ひ、考えた。・・・・・・・・・・ん？誰かに壊されたんだっけ？えつと、そういえば・・・・・・・・

俺が小学6年生の夏、俺はそのころ体が弱くてよく言葉でいじめ

られていた。そのころはまだ言葉だけだったから親には知られなかった。でもだんだんエスカレートしていき、たまに擦り傷を作って家に帰っていた。でも転んだとでも言えばばれなかった。でも更にひどくなり、最終的には、泥水に向かって投げられ、ランドセルをハサミで切られ、殴られ殴られ殴られでボコボコにされた。家に帰ると当然のことながらお袋に、

「どうしたの?! その傷。服もこんなに汚れているし。あら、ランドセルも切れちゃって。」

そこで俺は、

「転んだだけだよ」と言った。

すると当然、

「そんなわけないでしょ!」と言われた。

それから俺の1番困ることを言われた。

「ちゃんと言いなさい。」

でも俺は、

「・・・」

そこに親父が仕事から帰ってきた。

「ただいま。」

「ちよつとお父さん、この子からこんなになつたわけを聞いてください。」

すると親父は俺を20秒ぐらい黙って見て、

「早く着替えて来い、飯が冷めるぞ。」

意外だった。いつも厳しい親父だから叱られるのかと思った。

それから飯を食べ終わると親父が、

「おい、散歩行くぞ。」

と言った。何で散歩かは分からなくても付いていった。家を出た途端、親父は真剣な顔をして、

「誰にやられた。」

と言った。やっぱり隠せなかったかと思い、

「クラスの奴。」

と答えた。

「そうか。じゃあ行くぞ。」

「何処に？」

「そいつらの家に。」

俺はすごく嫌だったけど、親父がこんな俺のためにやってくれるなんて初めてだったから嫌なんて言えなかった。

1人目の家に着くと親父はドアをノックした。すると、

「はい、どちら様でしょうか？」

と出てきた。

すると親父は、

「今日、いやいつもお宅の息子にいじめられてるこいつの親です。」

「へ？」

「少し息子さんに話があるので呼んでもらえませんか？」

「困ります。」

「2回も同じことを言わせないでください。早く呼んでください！親父は声を大きくして言った。でも、

「いじめた事にはちゃんとやっておきますのでお引取りください。」

すると親父はとうとうきれた。

「はよ出せ言つとつのがわからへんのか！！こっちは息子をいじめたあんたの息子がゆるせへんのか！！！」

するとむこうはさすがに怖くなったのか父親を呼んできた。

「どうしましたか？」

とむこうの父親が言ってきた。

すると親父は普通の声に戻して、

「俺の息子があんたの息子にいじめられたんや。だからちょっと話があるから出してくれ。」

するとちゃんと理解してくれたのか呼んでくれた。そしていつもいじめていた奴が出てきた。話を聞いていたのか、怯えていた。

「君か、こいつをいじめてたのは？」

「い、いや、お、俺だけじゃないです。」

「俺だけじゃないやと？ふざけとんのか！やったのにはかわりないやろが！！」

「はiiiiiiii」

「こいつはな、もともと体が弱いのは知ってるやろ。だからっていじめんな！！」

「すいません！！」

「はあ、もおいしい。いくぞ。」

それから俺と親父は6軒回って同じことをやり家に帰った。

次の日、いじめていた7人が一斉に謝って来た。

「……てなはなしだったな」。その時の親父が「こよかったな」。でも、そんな親父にももう会えないんだよな。……あれ、なんで泣いてるんだ？悲しみは感じなかったんじゃないのかよ？なんで泣いてんだよ！……そうか、俺はかっこいい親父が好きなんだ。

何で俺こんなこと忘れてたんだ？すげー大切なことだろ？何度も何度も守ってもらったんだろ？俺は親父にありがとうって言ったのかよ？どうなんだよ、俺！

ふと机の上の紙が目に入った。なぜか俺はそれを開いていた。そこには、

『我が息子よ、後悔だけはするな』

と書かれていた。

それを見た途端、涙が止まらなくなった。

(後書き)

作品の出来はいかがでしたか？よろしければ感想の方よろしく願
いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2921g/>

忘れかけていた思い出

2010年12月29日20時03分発行